I saw a parson 12high

長く伸びた牧師

I saw a parson twelve feet high

世界は　たくさんの要素　でできていて
それらを積み上げることで　至極当然の結果を導いたり　納得し難い奇妙な未来を構築したりする

そもそも　納得し難い　とか　奇妙な　とかいう判断は
僕たちが　至極当然　側の世界にいるから　そう感じるのであって
その価値基準さえも　たくさんの要素　が作っているのだ

とにかく　世界は　たくさんの要素　の積み方に依るのであり
世界はひとつではない
積み上げ方の数だけ　世界は存在する

. . . . . .

ここに　かつて　タオル産業で栄えた町が在る

当時は　そこここの工場から　機械の音があふれ出し　好況のサイレンが鳴り響き
町全体が工場のようであった
たくさんの要素　の影響を受けて　ひとつ　ふたつと　工場は姿を消していった
残った工場は息をひそめて　そこにじっと耐えている
ほんの少し先の未来で　彼らがいなくなってしまうのは　至極当然　のことのように思われる
工場はうち捨てられ　産業のなくなったその町から　ひとびとはいなくなる
大事に梱包されたタオル　機械も　使わなかった糸も　埃がつもる

そこで繰り広げられているのは
タオル産業の灯を再び燃え立たせ　人々がものづくりに精の出る日
いま　ひとり　ひとりは　用があってそこへ行くのも　職人たちもあふれる程にいる
あんなから　発想を得る　受入れの技を育む　互いに教え合い　励ましあい　しながら　ものをつくる
それは　本来　ひとが生きる姿である
電気がついただけれど　それだってほんとうの世界

. . . . . .

タオル産業　はるか昔の　ものづくりの　ものさしで　はかられた経済の中で　もうひとつの世界を知覚する
もしくは　もうひとつの　ものさしで　はかられる　経済のなかで　すでに　ものづくりがはじまっているかもしれない

I saw a fishpond all on fire
I saw a house bow to the squire
I saw a parson twelve feet high
I saw a cottage near the sky
I saw a balloon made of lead
I saw a coffin drop down dead
I saw two sparrows run a race
I saw two horses making lace
I saw a girl just like a cat,
I saw a kitten wear a hat
I saw a man who saw these too
And said though strange they all were true

池をみかけた　火事でもえてた
家をみかけた　だんなにお辞儀していた
牧師をみかけた　長く伸びてた
小屋をみかけた　空をとんでた
風船をみかけた　鉛でできてた
棺をみかけた　落ちてしんでた
二羽の雀をみかけた　駆けっこしていた
二頭の馬をみかけた　レースを編んでた
少女をみかけた　猫そっくりの
子猫をみかけた　帽子かぶってた
おとこをみかけた　私とおなじものをみかけた
おとこは言った　ほんとうのことなんだ　嘘みたいだけれど

I saw a parson 12high

長く伸びた牧師

I saw a parson twelve feet high

駆けっこする二羽の雀

墜ちて死んだ棺

空飛ぶ小屋

火事の池

長く伸びた牧師

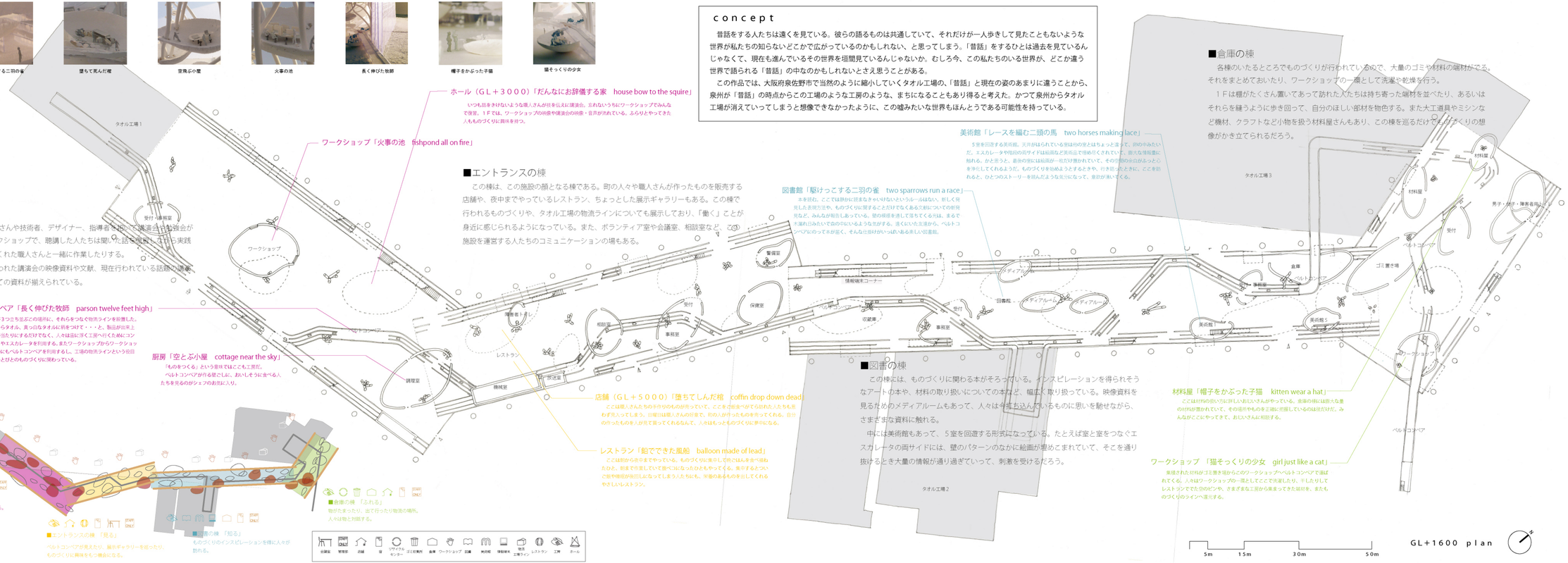
帽子をかぶった子猫

猫そっくりの少女

concept

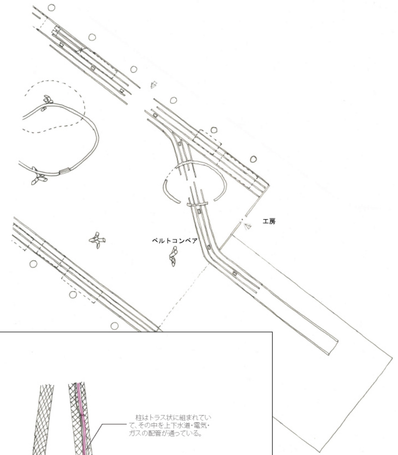
昔話をする人たちは遠くを見ている。彼らの語るものは共通していて、それだけが一人歩きして見たこともないような世界が私たちの知らないどこかで広がっているのかもしれない、と思ってしまう。「昔話」をするひとは過去を見ているんじゃなくて、現在も進んでいるその世界を垣間見ているんじゃないか。むしろ今、この私たちのいる世界が、どこか違う世界で語られる「昔話」の中なのかもしれないとさえ思うことがある。

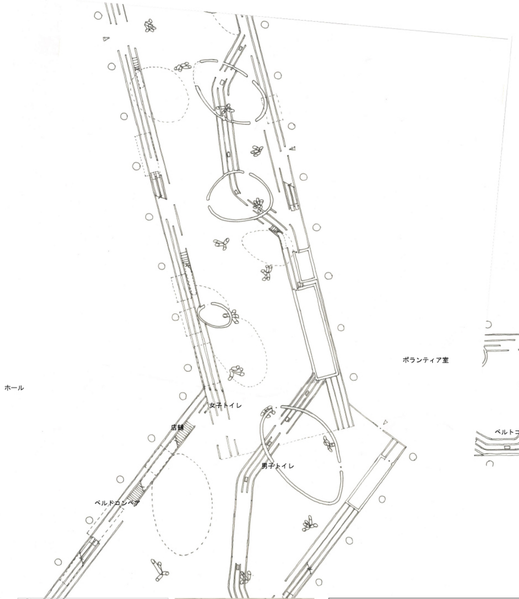
この作品では、大阪府泉佐野市で当然のように縮小していくタオル工場の、「昔話」と現在の姿のあまりに違うことから、泉州が「昔話」の時点からこの工場のような工房のような、まちになることもあり得ると考えた。かつて泉州からタオル工場が消えていってしまうと想像できなかったように、この嘘みたいな世界もほんとうである可能性を持っている。

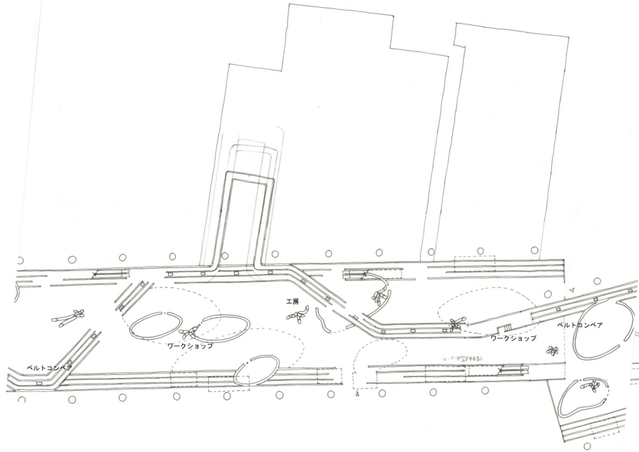


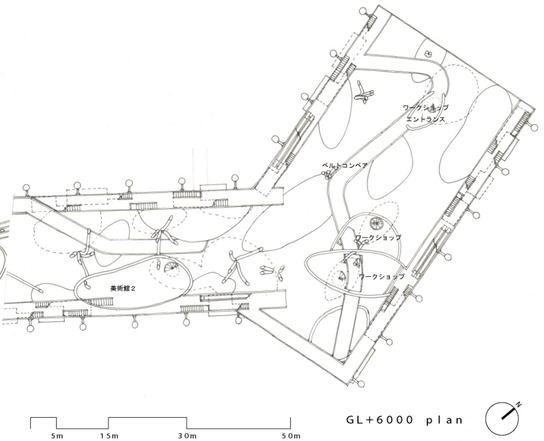
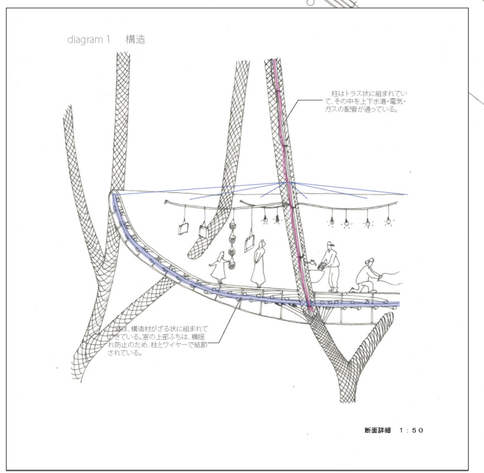
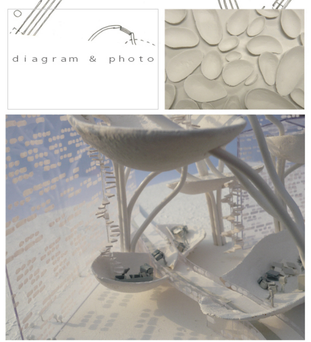
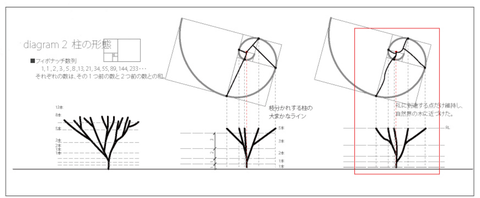
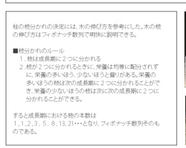
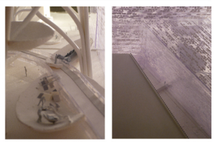
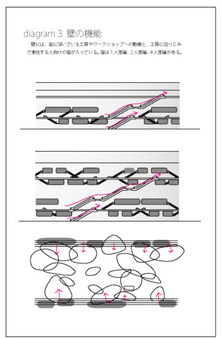
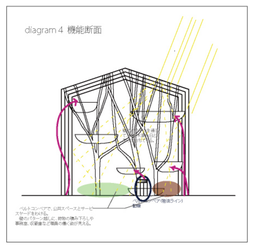
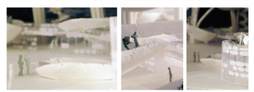
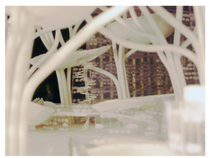
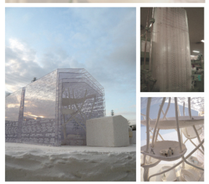
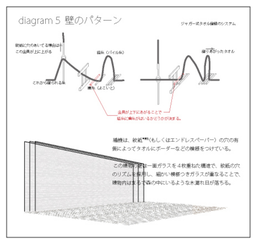
長く伸びた牧草

I saw a person twelve feet high









GL+6000 plan